国語科

子供の〈問い〉でつくる授業　～ツールを活用して考えを形成する子供～

新潟市立関屋小学校
佐山　将平（平成 26 年度）

これまで私の国語授業では、二者択一型の発問やスケール、ランキングを用いるなど、判断を促す発問を積極的に取り入れ、全員参加の授業を目指してきた。このような発問は、子供一人一人が自分の考えをもちやすく、友達の考えと比較しながら学ぶことができるため、授業への参加意欲を高める効果があった。

しかし、教師から与えられる発問に答えることが中心となり、学習に対して受け身の状態になってしまっていたのではないか。子供が自分から読み進める姿にはつながらずに、「教師が考えさせる授業」になってしまっていたのではないか。このような疑問をもつようになった。

そこで本実践では、「教師の問いに答える子供の姿」から、「自分の問いを追求し、考えを形成する子供の姿」への転換を目指し、子供自身の〈問い〉を学びの出発点とする授業づくりに取り組んだ。令和７年度３年生「モチモチの木」、令和８年度６年生「風切るつばさ」の実践では、単元を通した学習課題を設定した上で、子供が〈問い〉をつくり、自分たちで精選した〈問い〉を協働的に追求した。また、〈問い〉に応じて人物関係図や三角ロジック、心の数直線などの読みのツールを自ら選択し、考えを整理しながら友達との交流を通して、自分の考えを形成していった。

これら二つの実践を通して、子供自身が〈問い〉を立てて、その〈問い〉を追求するためにツールを選択し、友達と交流することで、考えを形成する姿が見られた。

しかし、子供たちに〈問い〉をつくる必要感があったのか、子供たちはどのように〈問い〉を選択していたのか、見通しをもって選択できていたのかなど、〈問い〉については多くの課題が残った。

今後も主体的・対話的で深い学びの実現に向けて、子供の学びをしっかりと見取りながら、実践を重ねていきたい。